

<全体分析>

試験時間 120 分

解答形式

記述式中心。読解総合の一部と聞き取り問題は客観式。

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易 (易化・**やや易化**・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

- ・2021 年度から 3 年連続で、I 読解問題 (1,500 words 程度)、II 自由英作文問題、III リスニング問題(A・B) の大問 3 題構成だったが、2024 年度は I・II 読解問題 (700~800 words 程度)、III 自由英作文問題、IV リスニング問題(A・B) という大問 4 題構成となり、2020 年度の構成に戻った。ただし、大問 I・II の総語数、設問数は 2023 年度とほぼ同じで、分量的な変化はほとんどない。
- ・これまで読解問題は、3 年間出題された超長文 1 題型でもそれ以前の長文 2 題型でも、記述問題と記号選択の客観式問題が 1 つの問題の中に混在される形で出題されていたが、2024 年度は大問 I が日本語記述 (和訳と説明問題) のみ、大問 II が空欄補充と語句整序のみという形で出題された。なお、客観式が中心 (記述式は和訳 1 題のみ) という読解問題は 2003 年度などに出題事例がある。
- ・自由英作文問題は 2016 年度以降出題形式が安定していない。2022 年度、2023 年度と 2 年続けて画像を描写させる問題が出題されたが、2024 年度は英語の疑問文に対して与えられた選択肢から解答を選んで答える問題で、従来に出題されたことがない形式になった。意見作文の問題で答えの選択肢が与えられているケースは他の大学の入試問題を見ても非常に珍しい。
- ・リスニング問題は 2023 年度同様、記号選択の客観式問題しか出題されなかった。放送文の総語数は 1,087 words で、2023 年度からは 170 words 増加したが、2022 年度(1,077 words)とはほぼ同じである。

その他トピックス

- ・従来読解問題で頻出であった下線部の意味・内容を問う問題が 2024 年度は 1 つも出題されなかった。
- ・2025 年度からリスニング試験は廃止されることが公表されている。

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	読解総合	「数学と文学の驚くべき関係」 (720 words)	英文和訳 1 題と内容説明問題 4 題のオール記述式。文章自体は読みやすく、5 を除き説明問題の解答根拠となる箇所はいずれも比較的簡単に見つかるが、制限字数の中での的確に解答をまとめることは容易ではない。 《出典》Sarah Hart, "The Wondrous Connections Between Mathematics and Literature", <i>New York Times</i> , April 7, 2023	標準
II	読解総合	「無理なく達成するためのヒント」 (876 words)	空欄補充が合計 10 か所 (副詞 5 問と前置詞 5 問) と、語句整序が 2 題のみ。いずれの設問も内容把握をしたうえで解答することが必要なため純粋な知識問題ではないが、2023 年度に出題された内容一致問題もないため、文章全体ではなく設問前後の部分的な内容把握で解答できるものが多い。5 つの空欄に対し選択肢も同数であるので、他の空欄との相対的判断で解答を選択することも鍵となる。 《出典》Dimitrios Tsatiris, "Why We Achieve: 4 tips to consider so you can master your need to achieve", <i>Psychology Today</i> , July 8, 2023	やや易

## &lt;大問分析&gt;

Ⅲ	英作文	1 「読書や映画鑑賞で焦点を当てるもの」 2 「外国語を話すときに注意すべきこと」 3 「リーダーとして最も役立つ資質」	与えられた3つの問いから1つを選び、100～140 words の英語で解答する。2020年度や2015年度以前に出題されていた意見作文に近いが、トピックが疑問文で答えの選択肢が3つ与えられている点は全く新しい傾向である。なお、設問に「理由を書け」という指示はないが、指定語数から解答だけでなくその根拠も含めるべきであると推測される。指定語数まで書くためには、適切な例を思いつけるかが鍵となる。	標準
Ⅳ	聞き取り	A 「ココナッツ型とピーチ型のコミュニケーション」 (559 words)	英語の講義を聞き、内容に関する6問の4択問題に答える。講義は2回流れる。設問は放送文の登場順で、設問の表現が放送文で使われているものと同じであるものが多く、比較的解答しやすい問題。	やや易
		B 「紫色のトマト」 (528 words)	英語の講義を聞き、内容に関する6問の4択問題に答える。講義は2回流れる。Aよりはやや解答しにくいものがあるが、紛らわしい選択肢は少ない。	やや易

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## &lt;学習対策&gt;

- ・受験生からは一橋大の出題傾向は安定しないという声も聞くが、変化しているのは大問の構成であり、出題傾向そのものは大きく変わっていない。超長文1題から長文2題へと戻った2024年度にしても、比率の変化こそあっても、出題された小問はこれまで出題されたことのある形式ばかりである。読解問題では「語彙や文法の正しい知識に基づいて英文を読み、内容把握に基づいて日本語で的確に解答をまとめる力」が問われることは一貫している。2025年度はリスニング試験がなくなるため、大問の構成が変わることはすでに決まっているが、表面的変化に惑わされず、土台となる英語力を高めることに注力してほしい。
- ・読解問題については論説タイプの英文を、はじめは短めのものから順に長いものへ論旨の展開を追いながら読む練習に取り組もう。また、「読めること」と「解けること」は必ずしもイコールではない。一橋大学の英語の一番の特徴と言ってよい内容説明問題については正しいプロセスを身につけて、字数制限内でうまくまとめる日本語の表現力も磨いてほしい。
- ・自由英作文の出題内容は近年流動的で、定期的に形式が変わると考えておいた方がよい。一橋大学の過去問題だけでなく様々な形式の問題に取り組むと良いだろう。